

教育民生常任委員会視察報告

教育民生常任委員会では、去る 6 月 27 日、28 日及び 29 日の 3 日間、長野県松本市・大町市及び富山県朝日町を訪問し、次のとおり視察を実施しました。

○ 視 察 日

平成 30 年 6 月 27 日（水）、28 日（木）及び 29 日（金）

○ 視察地及び視察目的

- 1 長野県松本市
健康寿命延伸都市・松本の取組みについて（健康づくり、食育）
- 2 長野県大町市
ごみ処理施設（HDMシステム）の展開・施設見学
- 3 富山県朝日町
介護サポーター養成教室と高齢者福祉推進員について・施設見学

○ 視 察 者

窪田美樹委員長、石岡実成副委員長、横山すみ子委員、鈴木道子委員、待寺真司委員、笠原俊一委員、伊東圭介議長（随行 永井局長補佐）

◇長野県松本市視察概要（6月27日）

1 松本市の概要

松本市は、本州そして長野県のほぼ中央に位置し、東に美ヶ原高原など八ヶ岳中信高原国定公園を擁し、西に中部山岳国立公園の北アルプスを望み、日本の屋根と言われる山岳地帯から、松本平と呼ばれる肥沃な盆地に恵まれた都市で人口は 239,519 人、老年人口割合は 27.6%（基準日 平成 30 年 4 月 1 日松本市調べ）、平均寿命は女性が 87.67 歳（全国 1 位）男性が 81.75 歳（全国 2 位）で日本一の長寿の都市です。

市の中心部にある「国宝 松本城」は、400 年以上前に築造され、5 重 6 階の連結複合式と呼ばれる我が国最古の現存する木造天守閣を擁しています。市の中央を犀川の支流河川が貫流しており、松本平はこれらの河川などにより形成された土地で、日照率が高く滋味肥沃で米・野菜・果樹などの生産が盛んです。また、美ヶ原高原の山麓や北アルプスとその山麓には合わせて 16 の温泉が湧出しています。

そして学問を尊ぶ進取の気質と伝統文化にあふれる「学都」、日本アルプスを擁し多くのアルピニストを迎える「岳都」、まちかどにバイオリンの調べが流れ

る「楽都」の「三ガク都松本（自然と歴史が織りなす美しい三重奏の響き）」を標榜しています。



2 美しく生きる。「健康寿命延伸都市・松本」について

(1) 美しく生きる。「健康寿命延伸都市・松本」の概要

松本市では、市民一人ひとりの命と暮らしを大切に考え、だれもが健康でいきいきと暮らせるまちづくり「健康寿命延伸都市・松本」の創造を進めています。平均寿命から健康寿命へと価値観の転換が進む現在は、まさに「美しく生きる」ための「生き方」が問われる時代と捉え、すべての市民の皆さんが、「命の質」や「人生の質」を高める「生きがい」を見出すことができるまち。そして「このまちで生きていく」と思っていただけ、そのようなまちをつくる「生きがいの仕組みづくり」を進めています。

そして、これまでの公民館や「福祉ひろば」の活動を通じて、地域の自治力・連帯力・教育力・文化力を総合した「地域力」を育み、「お互い様、お蔭様」の精神で、共に助け合う地域づくりを進め、平成26年度には全地区（35地区）に【地域づくりセンター】の設置が完了し、各地域が自らの特色を生かして地域の課題解決に取り組み、町会と市との協働を核とした松本市独自の地域づくりを行なっています。

(2) 行政のサポート体制

このように松本市では地域が基盤となり、地域課題の解決・生活の質の向上すなわち地域力の向上が健康づくりの原点となっており、特に前出の「福祉ひろば」の運営は、地域住民が中心となって実施されています。

そして「福祉ひろば」のさまざまな事業が高齢の方を中心に、障害のある方、子どもにも優しい「だれもが住みたいまち」づくりへと繋がっています。行政のサポートとしては、次の方々に学習していただき、地域で実践・活動・啓発をしてもらい、地域とのつながりを深めることを担っています。

① 健康づくり推進員

市民の「健康づくり」の一翼を担い、「健康寿命延伸」に向けて活動をしています。昭和 50 年から設置。2 年任期で O B はすでに 2 万人。平成 29 年 30 年で 866 名（女性 807 名、男性 59 名）が活動をしている。

活動の目的は、地域住民の身近なところから、健康づくり事業を推進すること（学んで地域へ広げる）。健康増進の推進者として、関係機関と連携し、健康づくり事業が地域にゆきわたるように活動すること。

② 食生活改善推進員

地域で食を通じた健康づくり活動を展開しているボランティアさん。昭和 57 年発足。会員数は 355 人。健康づくり推進員の O B も多数参加。

活動内容は育児サークルなどでのおやつづくり・小学生を対象に親子料理教室・小中学校での食育教室・男性対象の食事づくり教室・高齢者を対象とした会食会などを開催。

③ 体力づくりサポーター

サポーター自身の体力維持向上と共に地域の高齢者の体力づくりのお手伝いを通じて、地域のつながりを深める。サポーター登録者数は 485 人。

具体的な活動は健康づくり課実施の体力健診サポート・地区での簡単な体力測定の実施・地区健康教室等で、簡単な運動指導。

(3) 他団体との連携

そして、大学（信州大学・松本大学）の専門的な支援や若い学生の力を、イベントや子どもに関する事業、地域での講座に生かしてもらい、市民と

の繋がりを図っています。企業との連携事業としては、「街かど健康相談」「がん検診の受診勧奨」「共催での講演会」など、集客や費用面でノウハウを勉強させてもらいながら、連携を深め、実施しています。

(4) 健康づくりのキーワードは・・・

- ① 若いときから ②一次予防 ③地域・企業・大学の連携

(5) 今後への具体的な取組み・・・

- ① こどもの生活習慣改善事業（学校で血液検査・ピロリ菌検査を実施）
② 働き盛りの生活習慣病予防事業（企業に出向き実践指導）
③ 身体活動維持向上事業 ④ 自殺予防対策事業 ⑤ 食育推進事業



3 委員所感

<窪田美樹 委員長>

松本市は、急速に進展する超少子高齢型社会現象社会に対応するため、これまでのまちづくり政策を2段階に分け「健康寿命延伸都市・松本」を位置づけました。

第1段階では「健康づくり」「子育て支援」「危機管理」の充実・強化に取り組み、第2段階で「健康寿命の延伸」へと取り組んでいます。健康に関し「危機管理」が挙げられ問題意識の高さがうかがえます。いろいろな自治体が「健康寿命

を延ばす」「元気に老後を迎える」取り組みを行っていますが、松本市では「ただ寿命が長いだけでなく、病気を持っていてもしっかりつきあいながら寿命を延ばす」としています。

総合計画に「健康寿命延伸都市・松本」掲げ、「教育・文化」「経済」「環境」等々6つのまちづくりの基本目標それぞれに「健康」を付け「より良い状態を保つこと」と設定し、心身だけでなく経済・環境も健康でなければならないとしていました。地域コミュニティが35地区あり、最も人口の多い地区は20,000人弱、少ない地区は700人とかけ離れていますが、全地区に地域づくりセンターを設置し地区別の地域づくり計画を行い、そこに行政がきちんとシステム化をし、本庁課題解決チームを作り、地域づくり課が細かく動くという体制が出来ていました。また、実働面では企業や大学との連携が進み、アイデアだけでなく出資面での協力も得られ、有名人の講演や景品など市民がより参加したくなる体制作りとなっています。働き盛りの方への生活習慣病予防を事業として取り組み、健康講座メニューも豊富でした。子どものころから生活習慣が将来の健康づくりの基礎と、運動・学習に加え、学校健診に血液検査を加え、27年度からは糖尿病・尿酸値の検査も行っています。食育推進事業では、食品ロスへの取り組みにはとても興味を持ちました。小さなころから、また日常から食品ロスに意識を持ち、ロスを減らしながら豊富な食材をバランスよく食べると言う事は、一石二鳥にも三鳥にもつながると感じました。

<石岡実成 副委員長>

長野県松本市の視察では、【健康寿命延伸都市】構想について学んで来ました。

松本市では、急速に進展する超少子高齢化型人口減少に伴い、平成16年から『3K施策』として、「健康づくり」「子育て支援」「危機管理」の三つの柱の強化に着手し、更に平成20年からは『健康寿命の延伸』をテーマに、大幅な政策転換を実施して来ました。

平成22年度には、【健康寿命延伸都市・松本】の総合計画を定め、「経済の健康」「環境の健康」「人の健康」「生活の健康」「地域の健康」「教育・文化の健康」の6つのまちづくりの基本目標を設定しました。

今年2月に訪れた、長野県佐久市にもあったように、まちのあるべき姿、行政の目指す先全てを“健康”という言葉に掛け、私たちが一般的に使う健康という本来の意味から飛躍した素晴らしい取り組みは、今後の葉山が目指すべき姿そのものだと思います。

決して、派手な政策ではありませんが、一つ一つの 카테고リーに責任と情熱をもって、取り組んでいる姿勢は、地域柄ということもありますが、真似るべき姿が多々あり、町全体が健康な都市…まちづくりをしているという包括的なチームワークづくりを、今後の葉山でつukらないといけないと痛感しています。

食生活改善推進委員（完全ボランティア団体）が展開する食を通じた健康づくり、大学と連携したイベントや講座、企業と連携したまちかど健康相談など、住民が来る場所を作ることより、自らが出ていき、足を運び易い場づくりをしているという事業に至っては、是非ここ葉山でも実現させたい施策の一つでした。



<鈴木道子 委員>

「健康寿命延伸都市・松本」は平成22年の総合計画において、目指すべき将来の都市像として掲げられたそうです。急速に進展する超少子高齢型人口減少社会

を迎え撃つ意気込みで、これまでのまちづくり政策の転換がなされたと感じました。「健康」を「より良い状態を保つこと」とし、6つのまちづくり基本目標を設定しました。すなわち ①教育・文化の健康 ②経済の健康 ③環境の健康 ④人の健康 ⑤生活の健康 ⑥地域の健康です。

現市長就任の平成16年から「健康づくり」「子育て支援」「危機管理」の3K施策の第一段階を充実強化し、市長2期目の平成20年から、第二段階「健康寿命の延伸」へと展開されました。「健康寿命延伸都市宣言」が平成25年3月に議決されました。ロゴマークの「美しく生きる」とは、「この松本の地で生きていくことに“誇り”を持ち、市民としての“責任”を果たす。それが“品格のある美しいまち”につながる。」の言葉には、感動し、目を見開かされる思いがしました。装飾的な言葉では無く、あるべき市民の姿が具体性を帯びて導き出され、描き出されたように見えました。

35行政区には、最も人口の多い19,444人から、最も人口の少ない727人とばらつきのある状況があるなか、住民自治力と地域教育力と地域連体力による、お互い様の精神による助け合いで地域課題の解決・生活の質の向上を目指しました。福祉ひろばや健康づくり推進員、食生活改善推進員、体力づくりサポーター等の活動は、大学や企業等との様々な連携とともに充実した事業が展開されていました。

子どもの生活習慣改善事業、働き盛りの生活習慣病予防事業、働き盛りの健康講座、身体活動維持向上事業、体力測定・ロコモ度テストの実施、自殺予防対策事業、検診・予防接種の充実、市民歩こう運動、食育推進事業などにより健康寿命は延伸している状況が見受けられました。

松本市の「健康づくりの取り組み」について私は

- ・計画段階から具体的で盤石な施策であること
- ・全庁的な取り組みがしっかり実施されていること
- ・全ての施策や実施方法に具体性があること
- ・施策や実施方法には詳細な記述がなされ、分かりやすく、きめ細やかな表示がなされていること が成功の因であると考えます。

葉山町の施策のあり方や自身の提案施策についても、反省と同時に啓示を与え

られた視察でした。

健康寿命延伸都市・松本の取り組みについて〈食育〉

国で平成 17 年に食育基本法が施行され、平成 18 年に食育推進基本計画が策定されました。松本市では、それらを受け、食育推進基本計画(平成 20 年度～24 年度)を策定し、松本市の自然に恵まれた特性を生かした食育の推進と食育の周知を図りました。さらに第 2 期食育推進計画(平成 25 年～29 年度)を策定し、周知から実践にむけて「1 日 2 食は 3 皿運動～1・2・3 でバランスごはん～」を重点施策とし地域や団体などをつなぐ食育を推進したそうです。

総合計画(第 10 次基本計画)に基づく「だれもが健康でいきいきと暮らすまち」、
「一人ひとりが輝き大切にされるまち」の実現に向けた、食を通した健康づくりの基本となる計画に位置付けられました。

第 3 期松本市食育推進計画は、国と県の第 3 次食育推進基本計画の実践計画として、平成 30 年度から平成 34 年度までの 5 年間の実践計画として推進されています。基本理念は、「食にかかわる活動をつなぎ、市民一人ひとりの豊かな食習慣を育みます」～市民一人ひとりが自主的に豊かな食習慣を育めるような、より実践しやすい取り組みを推進～です。第 2 期計画の重点施策を継続し、子どもの頃から楽しく、全ての世代で取り組みやすく、「おいしく食べよう 具だくさんみそ汁運動」と「よくかむ 30 かみかみ運動～飲み込む前にあと 5 回～」を柱に据えて食育の推進を図っているところです。

5 項目の課題が列記されていますが、これは葉山町にも共通する大変整頓された項目と見受けられました。以下に記述します。

① 健康寿命の延伸につながる食育の推進

- ・バランスのとれた食事をする人やよくかんで食べる

人の割合が国と比べて低い。

⇒より一層、バランスのとれた食事やよくかむことへの意識を高め、健康寿命の延伸につながる支援が必要

② 若い世代への食育の推進

- ・朝食を毎日食べている人は増加したが、生活習慣病予防のための実践は、

他の年代に比べて低い。

・若い女性のやせは全国的には減少傾向だが、依然して2割以上を占める。

⇒若い世代に対し、望ましい食習慣を実践していくための支援が必要

③ 一緒に楽しく食べる機会を通じた食育の推進

・家庭において、食に関する話や子どもと一緒に調理することが減少

⇒家庭はもとより、家庭以外の学校や地域などで、ともに作って食べる(共食)機会を増やす取り組みが必要

④ 食を取り巻く環境と生産の連携

・若い世代で、生産や流通への関心が低く、食べ物を残すことを何とも思わないと考えている人が増加

⇒残さず食べよう！30・10運動や農作業体験などを通して、環境や生産について学び、食への感謝の気持ちを育む取り組みを進めることが必要

⑤ 食文化の継承と地元食への愛着の推進

・伝統食などの実践の割合が低い

・食事に関する作法やしつけの情報を必要とする20、30代女性は多い

⇒地元の食材や伝統食、作法などの食文化に関する関心を高められるような、新たな視点からの周知が必要

以上のように、課題分析を明白にして、以下3点の基本目標を設定しました。

〈基本目標〉

① バランスのとれた食事を通して、生涯を健やかにすごせる心と体を育む

・家庭や学校などにおける豊かな人間性を育むための食育の推進

・生活習慣病の予防や改善に結びつく食育の推進

② 共食や体験からの食の楽しさを広げる

・体験や交流による食育の推進

③ 地域の食材をおいしく味わい、食文化や環境について学び、伝える

・食を大切にする気持ちを育み、食文化を伝える食育の推進

これらの目標は、平成29年度の現状と平成34年度の目標が、明白に数値化されておりました。さらに、計画の進行管理は、課長会議である食育推進計画庁内推進会議と担当者会議の食育推進計画推進庁内調整会議が庁内会議とし

て、また健康福祉 21 市民会議と健康・母子専門員会が市民会議として、推進状況の審議と的確な進行管理がなされていました。主な取り組みは、22 事業にも渡り、「おいしく食べよう 具たくさんみそ汁運動」や「よくかむ 30 かみかみ運動～飲み込む前にあと 5 回～」など分かりやすく、親しみ感のある運動が展開されていました。

「すこやか食プランまつもと」は、全庁的な取り組みと市民一人ひとりの全庁的取り組みがしっかりとタックルを組み実施されている模様が明白に見て取れました。

詳細かつ十分な現状分析のもと、基本理念・基本目標・基本施策・実施取り組みが体系化された経過を学ぶことができました。松本市の今後の経緯にも注視しつつ、葉山町の施策に活かす政策技術向上を課題と捉えました。

<待寺真司 委員>

長野県松本市は、平成の大合併により長野県内では 1 位、全国でも 23 位という広大な行政面積（978.47 km²）を誇る、人口約 24 万人の都市です。平成 22 年度に策定した総合計画において、目指すべき将来の都市像として「健康寿命延伸都市・松本」を掲げ、人の健康だけではなく、地域・経済・生活・環境・教育文化の 6 つの健康を、より良い状態に保つこととして基本目標ごとに事業計画を策定しました。そして、平成 25 年 3 月には、議会議決を得て「健康寿命延伸都市宣言」を行うなど、日本国内にとどまらず世界に向けてもその取り組みが注目されているところです。かねてより視察したいと思っていた自治体の一つでもあり、とても楽しみにしていました。

今回の視察では、主に「人の健康」に焦点を当てた内容の説明を受けました。以前長野県佐久市でも伺った「健康づくり推進員」が、市民の健康づくりの一翼を担って、まずは自分から次に家族へと、そして地域へと健康づくりの輪を広げる運動に積極的に取り組んでいます。長野県全体としてこのような活動が進んでおり、平均寿命が男女とも全国トップクラスという成果が出ています。松本市ではさらに食生活改善推進員が、市内小中学校に出向いて食育講座を開催したり、味噌汁の塩分調査・親子料理教室の開催など、多岐にわたり活動されています。

会員数も県内 1 位を誇るなど、食に対する意識の高さが伺えます。中でも食品ロスに対する取り組みであり、松本市発祥の「30・10 運動」などユニークな活動にも市の意気込みが感じられました。

また身体の健康に関しては、産官学連携の取り組みが進んでいます。信州大学や松本大学との連携では、こどもの生活習慣改善事業として、小学校 4 年生と中学校 2 年生全員に血液検査を実施し、自身の健康に対する意識付けを高めたり、食や運動に関する講座の開催、休み時間に運動指導者を派遣するなど、こどもの生活習慣が将来の健康づくりの基礎となるとの考えから、重層的な事業が展開されています。企業との連携事業としては、若い時からの認知症予防対策として、企業協賛により「健康グッズ」が当たる予防チャレンジプログラムの実施や、大手コンビニエンスストアでの健康相談事業の実施、地元信用金庫では「がん検診」受診推奨プログラムとして、PR パンフレットの作成・配布や著名人の講演会などを 1,000 人規模で開催して周知するなど、官民一丸となって健康寿命延伸都市の名に相応しい様々な活動に心惹かれました。

<笠原俊一 委員>

6 月 27 日から 29 日の 3 日間長野県松本市の健康寿命延伸都市について・大町市のごみ処理施策について、富山県朝日町の介護サポーター養成教室と高齢者福祉推進についての視察をしました。

初日の松本市には、午前中に到着し昼食と松本城の見学もでき、駅周辺は大都市の雰囲気のある町であることや、城下町特有の区画整備された道路も見学できました。松本市は 30 年 4 月 1 日において人口 23 万 9519 人、104,570 世帯で高齢化率 27.6 と葉山の 10 倍規模の割に葉山より高齢化は進んでいない。面積は県内一広く 978.47 km²と葉山の 57 倍です。街の西部に中部山岳国立公園の北アルプスや東部には美ヶ原高原や八ヶ岳中信高原国定公園もあります。また市内には乗鞍高原温泉・白骨温泉・浅間温・泉美ヶ原温泉など 16 の名湯もあります

昨年視察した佐久市同様に、住民の健康に関する施策が大変進んでいる感を受けました。菅谷市長は平成 16 年に市長に就任し、1 期目に少子高齢社会と人口減少に対して大いに危機感を感じ、「健康づくり」「子育て支援」「危機管理」の 3K

施策を行いました。2 期目の平成 20 年から「健康寿命延伸都市・松本」を標榜し、総合計画の柱に市民・行政・産学にわたり、6 のまち作りの基本目標のすべてに「健康」をつけ、より良い状態をと持つこととしました。「経済の健康・環境の健康・人の健康・生活の健康・地域の健康・教育文化の健康」が基本目標です。

健康寿命延伸都市宣言

「健やかでいきいきと暮らすことは、私たちの共通の願いです。そのためには、自らの心と体、そして、私たちが暮らす松本のまちが健康であることが大切です。私たち松本の市民は、一人ひとりの「いのち」と「暮らし」を尊重し、「健康寿命」の延伸につながる人と社会の「健康づくり」をめざし、ここに松本市を「健康寿命延伸都市」とすることを宣言します。

平成 25 年 3 月 14 日 議決

前記した佐久市は大学病院等、総合病院も多く、健康づくり推進員の制度化などの共通する取り組みも盛んで、競っている感を受けました。

過去、美ヶ原から佐久平に山越えした経験があり山を挟んではいますが、隣接地となる松本市の菅谷市長の前職は医師との説明を受け、行政運営の前提が健康なのだ、説明の随所に感じました。

◇長野県大町市視察概要（6 月 28 日）

1 大町市の概要

長野県の北西部、松本平の北に位置する大町市は、3,000 メートル級の山々が連なる北アルプス山脈の麓に位置し、清冽な雪解け水と澄んだ空気、四季折々の景観に恵まれ、また古くは「敵に塩を送る」のことわざの舞台ともなった「塩の道」千国街道の宿場町として栄えました。そして北アルプス登山の拠点として黒部ダム、立山黒部アルペンルートの長野県側の玄関口として、多くの観光客で賑わう山岳観光都市です。さらに日本初の山岳博物館があり、北アルプスの自然や登山の歴史を展示しており、カモシカなどを飼育

する付属園や山岳図書資料館も併設されています。人口は約 28,000 人、北の白岳から南の槍ヶ岳頂上までを収め、市街地の標高は 700m 余りの典型的な内陸性の気候で、青木湖・中綱湖・木崎湖の三つの湖が連なる仁科三湖や豊富な温泉、国宝仁科神明宮や全国でも珍しい子どもによる流鏝馬が行なわれる若一王子神社など、豊かな自然と文化の風薫る街です。



2 ごみ処理施設（HDMシステム）の展開・施設見学

(1) 生ごみ処理の概要

大町市では以前より所有していた牛糞堆肥処理施設を利用して、好氣的発酵で堆肥化する（HDMシステム）を導入しています。市街地から 20 分程の山林の中にある大町市堆肥化センターへ、市内の保育園や学校給食の残渣、病院・福祉施設・宿泊施設等から出る残飯、畜糞を曜日ごとに回収し 8 つに分かれたブロックへ搬入しています。その後かくはんし、24 時間後には 90% 以上が堆肥となり、販売・提供しています。

※HDMとは High Decreasing Microbe-bionic の略 微生物を利用して
生ごみの減容化処理を行うシステム



3 委員所感

<窪田美樹 委員長>

<ごみ処理施設の展開について>

大町市では、今後葉山町が導入しようとしている「生ごみ減容処理システム」を採用し、市内の生ごみの一部を処理しています。対象が、旅館、病院、学校など大きな施設が主で個人宅の収集はごく一部の地域だけでした。葉山町が採用しようとしている、袋を利用した収集ではなく、破袋機購入経費が高額だったと容器にて回収しています。袋収集より収集時の臭気があるように感じました。

今後、収集地域の拡大をするか尋ねたところ、予定はないとのこと。処理そ

のものの費用は安価だが、戸別収集にすれば収集経費がかなり上がり、焼却処分の方が安価なためと言う事でした。葉山町は、すでに戸別収集を行っていますので、燃やすごみと生ごみの分別の徹底、収集方法が課題ではないでしょうか。しかし、全町戸別収集を行うので容器での回収は難しいかと思いました。

<石岡実成 副委員長>

長野県大町市では、「生ごみ減容化処理システム」について学びました。葉山町クリーンセンターの再整備に際しても、導入が検討されている事でもあり、埼玉県久喜市に次いでの視察となりました。処理費用のコスト面や、臭いの問題など、まだまだ比較検討すべき点があるとは思いますが、HDMシステムは、フレキシブルな対応が可能なごみ処理システムだけに、環境に配慮できるメリット等も加味し、前向きな検討をするべきと思っています。



＜待寺真司 委員＞

大町市では、以前より牛糞を堆肥化する施設を有していて、その施設の一部を利用して、30年1月に視察した埼玉県久喜市の生ごみ処理施設（HDMシステム採用）と同じように生ごみの減容化・資源化を行っています。その堆肥化センターの現地踏査では、やはり一番気になっていた臭気について報告いたします。同施設では前述の通り牛糞も同じ施設内で堆肥化しているため、久喜市のそれと比べると施設内ではやや鼻をつくきつい臭いを感じられました。ただ一度建物の外に出ると全く臭気は感じられませんでした。排気設備により空中へと放出されていると推察されます。立地場所はまさに森林の中、周囲には住宅は全くない場所に建設されています。やはり近隣に民家のある場所への建設には臭気に対し、かなり慎重に対応しなくてはならないと改めて強く感じたところです。大町市での悩みは、野生のお猿さんが生ごみの搬入時間を見計らって、大勢で施設に近づいてくるのが怖いとのことでした。立地場所により悩みも大きく違ってくると思いました。

◇富山県朝日町視察概要（6月29日）

1 朝日町の概要

朝日町は富山県の東端に位置し、東に新潟県糸魚川市、西に入善町、南に黒部市と長野県白馬村と接しています。町の東・南部には白馬岳・朝日岳を主峰とする北アルプス連峰がそびえ、小川・笹川・境川などの河川は、これらの山々に源を発し、日本海に注いでいます。このように海・山・川に恵まれた朝日町は、海拔0mから3,000mまで、227.41平方kmの面積を有し、その約60%が「中部山岳国立公園」と「あさひ県立自然公園」に指定されている風光明媚な町です。海岸は「日本の渚百選」にも選ばれているヒスイ海岸です。ヒスイの原石が打ち上げられ拾える海岸としては、世界的にも珍しいと言われていています。

また、ビーチボール発祥の地として、7月に翡翠カップビーチボール全国大会と9月に全国ビーチボール競技大会を開催しています。

そして、半年間役場職員として派遣された現職の新聞記者が著書した「消えてたまるか！朝日町」（2017年9月発刊）は、全国の市町村に贈呈され、朝日町の将来像「夢と希望がもてるまちづくり 朝日町」の構想実現に大きく関与している様子があり、今後の発展が楽しみな町でもあります。



2 介護サポーター養成教室と高齢者福祉推進員について・施設見学

(1) 介護サポーター養成教室の概要

朝日町には介護サービス事業所 15 カ所と特別養護老人ホームが 1 カ所ありますが、人員不足で休床が生じていて、今後、介護サービスの利用率が増えていくことが見込まれる中で、このような人員不足を少しでも解消するために、介護業務のお手伝いをする「介護サポーター」を養成し、事業所などで活躍していただき、介護職員の負担軽減も図っています。

「介護サポーター養成教室」の講師などは、事業委託として事業所に委託し、受講者には、修了後（希望者に）事業所へ紹介することとしています。

初年度の今年は、20名が受講し、6名が介護サポーターとして事業所で活躍することとなりました。

(2) 高齢者福祉推進員の概要

ひとり暮らし高齢者等（ひとり暮らし高齢者、寝たきり、認知症の在宅要援護高齢者、高齢者のみ世帯）の家庭へ恒常的な訪問活動を実施し、高齢者の孤独感の解消と日常生活の安否を確認するとともに、援護を必要とする人のニーズの把握、各種福祉サービスの利用について啓発したり、ひとり暮らし高齢者等の近隣住民で見守りやゴミ出し等の支援を行っていただける方を民生委員児童委員の推薦により、町が委嘱しています。

(3) 施設見学

①朝日まちなか体育館・・・スポーツ、生涯学習、地域イベントや文化活動の拠点として、「利用しやすくふれあいを感じられる」体育施設を平成30年4月に開館。バドミントンコート2面の広さがあり、まちなかの賑わい活性化を図るとともに、町民の健康増進につなげる施設である。



②北陸街道五又路（クロスファイブ）・・・朝日町五差路周辺複合施設として、商工会、社会福祉協議会、泊地区自治振興会の事務所が入り商業

振興・買い物支援対策【まめなげ市場】や地域における賑わい創出・町民が集うふれあい拠点【イベント広場】【ふれあい広場】があり、町の情報発信拠点施設である。

③朝日町移住定住拠点施設「こすぎ家」・・・町民で組織された「朝日町再生会議」で提言された、「移住定住をすすめていくには、移住を検討している人が気軽に立ち寄れるような相談の場が必要」として、泊駅前には保管されていた「料亭こすぎや」の建物を活用し整備され、平成30年4月に開館。相談員等が常駐し支援策のPR、住居や就業等の情報提供、生活相談等を行うとともに駅前の好立地を活かし、観光案内所としての役割も果たす施設である。



<石岡実成 副委員長>

富山県朝日町では、「介護サポーター養成教室の実施状況とその後」「高齢者福祉推進委員設置の意義と内容」について学び、「まちなか体育館」の視察へも行って来ました。

介護サポーター養成教室においては、介護福祉士の成り手が減少する中、最終目標として、実際の職として繋げられる事を理想としつつ、先ずは、介護職員の負担軽減をメインに、実際の現場の状況やサポート方法を学ぶと場としていましたが、中々ハードルが高いように思えました。とは言え、今後、自宅で介護せざる得ない家庭が増えるであろう現実を踏まえれば、実践的な介護方法を学ぶという考え方は必要であり、介護サポーターというよりも、介護に関する講座やネットワークの構築は強化すべき問題だと再認識しました。

<横山すみ子 委員>

今回の委員会視察は、6月27日に松本市で「健康寿命延伸都市・松本の取り組み」、28日には大町市では「ごみ処理施設の展開」の説明の後、大町市環境プラントを見学しました。29日には富山県朝日町で、「介護サポーター養成講座の実施状況とその後」「高齢者福祉推進員設置の意義と内容」「まちなか体育館」の視察に加え、「移住定住拠点施設こすぎ屋」も訪問しました。

朝日町役場で実際に働いた朝日新聞の記者の著書「消えてたまるか・朝日町」の本を視察前に読み込んで、朝日町に向かいました。

視察当日は、町長・議長が、挨拶だけでなく、担当者の説明中も同席されているという熱意溢れる対応でした。また列車の発車時刻までの時間も活用して、当初の予定になかった「移住定住拠点施設こすぎ屋」にもご案内いただきました。

「介護サポーター養成講座の実施状況とその後」

非常にヒントになる様々な施策を展開しておられる朝日町ですが、本年初めて実施されたこの事業は、実施後のフォロー次第で、様々な効果が上がる取り組みではないかなと感じました。

担当職員の説明によると、朝日町には介護サービス事業所が15か所ある。町

で唯一の特別養護老人ホームでは、人員不足による休床が生じている。高齢者は、平成 28 年度にピークを迎え、今後減少傾向にはあるものの、将来人口推計では、介護サービス事業の利用率が高まる 75 才以上人口は増えていくことが見込まれている。このような状況の中で、介護サービス事業所において介護サポーターが活躍することにより、介護職員の負担軽減が期待できる。として、社会福祉法人に 66.000 円で事業委託。様々な周知活動を行った結果、24 名が受講申し込み、20 名が実際に受講されたとのこと。

講習終了後、6 名が介護サービス事業所への紹介が可能との結果が出たとのこと。その内訳は、就労も可が 3 名。ボランティアとして活動可が 3 名。参加者の年代は、60 代、70 代が多かったとのこと。また、他の方々も、自宅での介護に役立つと好評で、来年度も実施したいと思っていると担当課長が説明されました。

予算額も少ない地味な施策ですが、事業実施の効果は大きいのではないかと感じました。多様な目的を持って、少し専門性のある講座を開催し、仕事やボランティア活動につなげるようお手伝いするという丁寧な取り組みは見習いたいものと思います。

<鈴木道子 委員>

介護サポーター養成教室

朝日町は、富山県の東端で新潟県との県境にある町です。人口 12,185 人、4,838 世帯で、人口の減少率は県内 15 市町村で最も悪く、2015 年の国勢調査によると、5 年前に比べて 10%も減っていました。また、2014 年「日本創世会議」によると、県内で唯一消滅可能性が高いとされました。しかし、2016 年にスタートの第 5 次朝日町総合計画では「夢と希望が持てるまちづくり朝日町」を将来像に掲げ、各種施策を展開しています。

基本テーマは

- 1 子育て応援日本一のまち
- 2 移住、定住、交流で賑わうまち
- 3 生涯健康で活躍できるまち

の 3 項目を掲げています。

介護サポーターとは、介護サービス事業所等で洗濯物たたみや話し相手など介護業務の手伝いを行う人です。2018年から養成教室が始められました。

町内には、15カ所の介護サービス事業所があるそうですが、町で唯一の特別養護老人ホームでは人員不足による休床が生じている状況です。将来人口推計では介護サービスの利用率が高まる75歳以上人口が増加の見込みであり介護サポーターの活躍により、介護職員の負担軽減が期待されるとの見通しです。

介護サポーター養成教室は、広報、ホームページ、ポスター掲示、チラシにより参加者を募集しました。50分を6コマで昼食付き、無料の講座で24人の申し込みがありましたが、介護サービス事業所への紹介可能者数は6人でした。

対象は、高校生から高齢者までで、受講後には、介護サービス事業所等で洗濯物たたみや話し相手など、介護業務の手伝いですが、養成教室は充実した講義と実技が組み込まれておりました。とろみ食の体験や車椅子体験、ベッドから車椅子への移乗、ベッド上での体の移動など介護業務の手伝いとしての基本が組み込まれておりました。

葉山町でも高齢化の進展と介護の担い手不足の状況は予測される事であり、朝日町の介護サポーター養成教室事業は大いに参考としていくべきと考えます。

高齢者福祉推進員設置の意義と内容

ひとり暮らし高齢者等の近隣住民で見守りやゴミ出しなどの支援を行っている方を民生委員児童委員の推薦により町が委嘱するものです。

ひとり暮らし高齢者等の家庭へ、恒常的な訪問活動を実施し、高齢者の孤独感の解消と日常生活の安否確認をするとともに、援護を必要とする人のニーズの把握、各種福祉サービスの利用について啓発します。

高齢者福祉推進員は平成24年までは年額3,000円の報償費の支給がありましたがケアネット活動への移行を踏まえて廃止されました。

「ケアネット活動」とは、平成15年から富山県社会福祉協議会が中心となり進めている地域で支援が必要な方に対し様々な個別支援を提供する活動です。

軽い認知症のひとり暮らしの高齢者、日中ひとりで家にいる閉じこもりがちな高齢者、子育てに不安を持っている世帯、心身に障害がある方や支える家族の方な

どの要支援者・世帯と共に、地域住民、専門職が一緒になって問題解決を図ります。さらにニーズを把握し、課題解決に取り組む活動を通じて住民主体による福祉コミュニティづくりを推進することを目指します。

- ・ひとり暮らし、高齢者世帯、介護世帯、障害者世帯などの調査聞き取りなどで支援が必要な方のニーズを把握します。

- ・地区社協、民生委員または福祉関係機関から町社協へ相談をしケアネット活動について相談します。

- ・ケアネット活動コーディネーターと担当民生委員などが対象者のお宅を訪問し、ケアネット活動について説明をします。

- ・活動の同意を得て、町社協が調整役となり支援プランを立てます。さらに地区社協や民生委員、近隣住民などの2～3名程度でチームをつくり必要な活動について話し合います。

- ・チーム員は見守りや声かけなどの活動を進めます。要支援者やチーム員の活動状況報告を受け、必要に応じて町社協の専門員が相談に応じます。

- ・ケアネット活動コーディネーターがチーム員の活動報告に基づき、必要に応じて支援内容の見直しや検討会などを開き支援の調整をします。

以上のような活動の基本的な流れのもと、誰もが笑顔で元気に暮らせる地域づくりを進めていました。

近隣住民と町社協専門員にケアマネジャー、保健師、役場保健課、訪問看護師、ホームヘルパー、医療ソーシャルワーカー、生活支援コーディネーター、かかりつけ医、子育てに関する専門職などの多彩な構成員によるケアネット活動は孤立や閉じこもり予防のみならず、生活・福祉課題の早期発見につながる逞しく安心な制度と見受けました。

ひとり暮らし高齢者の体調急変をボランティアが発見・通報し大事に至らなかったなど、ケアネット活動が役立ったケースも伺いました。

高齢者の多少に関わらず、このような地域住民の繋がりを再構築して、住み慣れた地域で安心してみんなが笑顔で元気に暮らせるまちづくりを目指すことが、我々に共に課せられた重要な目標であることを再確認しました。

<待寺真司 委員>

地域の人口減少問題をテーマとした「消えてたまるか！朝日町 記者の役場体験記」を発刊して、全国の自治体に参考送付された朝日町。東は新潟県糸魚川市に接する、富山県の東部に位置し、人口約 12,000 人の自然豊かな町です。移住・定住促進のために、様々な福祉施策や子育て支援策に取り組んでいます。今回の視察のテーマではなかったのですが「子育て応援日本一のまち」を掲げて、子育てや教育施策が重層的に展開されています。また町のテーマとして「移住・定住・交流で賑わうまち」を掲げ、積極的に様々な事業展開を図っています。その目的に添って建設されたばかりの「朝日まちなか体育館」を現地踏査しました。①地域における賑わい創出②集い、ふれあうことのできる施設③スポーツ・生涯学習・文化活動等の拠点施設としての役割を担い、総事業費約 2 億 2 千万円で建設されたコンパクトな体育館です。バトミントン 2 面とドッジボールコートが 1 面のみの小さな施設ですが、まちなかにある利便性と、バトミントンコートを使用して行われる「ビーチボール」競技の関係者がよく利用されています。

ビーチボール競技は、朝日町が発祥の地で、ビーチボールをネットを挟んで 4 人同士で対戦するビーチバレーとバレーボール競技を掛け合わせた、お年寄りから子どもまで楽しめる生涯スポーツです。全国大会や翡翠カップという 60 歳以上と 70 歳以上の男女別に行われる大会を開催するなど、去る 7 月 7 日・8 日に開催された第 25 回大会には、北は岩手県奥州市、南は奈良県天理市までの 9 都府県 35 市区町から 132 チーム 669 人の参加者が集ったそうです。ニューススポーツを通じた交流は、やがては移住・定住につながっていくのではと、小さな町の挑戦に感服いたしました。来年は 9 月に開催予定の全国大会に葉山からチームで参加できればと考えております。

日本の渚百選でもある「ヒスイ海岸」やアルプスを望む雄大な自然と景色がとても素敵な朝日町。体育館の近くには五差路があり、それにちなんで名づけられた「とやま朝日町 北陸街道 五叉路 C r o s s F i v e」という真新しい複合施設には、町の社会福祉協議会や商工会が同居し、朝日町の生鮮品を販売する「まめなけ市場」も併設されていて、土日を中心にイベントが開催されています。都市部にはない魅力と住みやすさを前面に、町役場と住民が一丸となって、消えて

たまるかの思いで進められている朝日町のまちづくりは、大変参考になるとともに大いに刺激を受けるものでした。

以上、ご報告いたします。

平成 30 年 10 月 11 日

教育民生常任委員会